

プラタナスグンバイに対するチアメトキサム剤の防除効果

○上山 博・新屋 卓*・徳丸 晋**

(京都府病虫害防除所・*井筒屋化学産業・**京都府研究普及ブランド課)

侵入害虫プラタナスグンバイ *Corythucha ciliata*(Say)は、わが国では2001年に愛知県で初めて発生が確認され、これまでに1都2府14県で発生が確認されている。

本種は、プラタナスの美観を損ねるだけでなく、周辺住宅に干してある洗濯物や布団に飛来するため不快害虫になっているが、これまで本種の防除に関する知見はほとんどない。また、市街地の街路樹として植栽されていることが多いプラタナスでは、農薬の散布剤による防除は飛散の影響が考えられる。

そこで演者らは、飛散の影響がないチアメトキサム剤の樹幹注入処理による防除効果について実地検討したので報告する。

試験方法

試験は、京都市下京区の街路に植栽されているプラタナス(樹高約10m)でおこなった。

試験区は、プラタナス1本を1区とし、チアメトキサム液剤「商品名アトラック」の標準量処理区(400m³ l / m³注入処理)、1.5倍量処理区(600m³ l / m³注入処理)および無処理区の3区を設けた。反復は3回おこなった。

2009年5月7日にプラタナス樹の幹周囲にドリルを用いて5cm程度の穴を開け、チアメトキサム剤を400および600m³ l / m³の割合で注入した。

処理直前(5月7日)から処理138日後(9月22日)まで約1週間毎に、各区任意の10葉(地上約3m)におけるプラタナスグンバイの発生個体を成幼虫別に調査した。併せて上山ら(2007)の方法で、本種による被害を目視によって調査した。また、処理28日後(6月4日)および処理83日後(7月29日)には、地上約6および8mにおける発生個体数も調査した。

結果および考察

処理直前のプラタナスグンバイはそれぞれの区において1~8頭/10葉の成虫が確認された。処理7日後には、標準量処理区、1.5倍量処理区は成幼虫の発生は確認されず、両区とも処理138日後までプラタナスグンバイの発生を極めて低い密度(0.0~0.7頭/10葉)に抑制し、被害も観察されなかった。一方、無処理区では処理7日後は2頭/10葉であったが、その後増減を繰り返し、調査期間中発生個体数が最も多かった処理77日後(7月23日)には、10葉当たり成虫58頭、幼虫127頭になり、被害についても8月上旬から25~50%の葉に黄白化葉が確認された。

また、樹高別の調査では、標準量処理区、1.5倍量処理区とも6m、8mのそれぞれの高さで成幼虫は確認されなかった。

以上の結果から、プラタナスグンバイに対する本剤の防除効果は、標準量処理区、1.5倍量処理区とも高いと考えられた。